

(挿絵 報道) 『都新聞』昭和十一年

「お馴染みのお歴々で 挿絵クラブ」生る
権利義務は総て共同で処理 けふ四十余名で発会式



写真上から、石井鶴三、岩田専太郎、中川一政、木村荘八、林唯一。

挿絵画家の統一的機関であった「挿絵協会」が数年前事実上解消を遂げてより、現在僅かに斎藤五百枝氏ほか数名の会員を擁する「日本挿画院」を残すのみであった挿画界に、最近大同団結の気運熟し、十六日斯界の重鎮を網羅する「挿絵倶楽部」の結成が行われることとなり、分離結合常ならざる最近の美術会に一石を投じている。

数年前まで美術界から異端視されていた挿絵の芸術的進出と同画家の躍進にも拘わらずこれに応ずる統一的機関のないのを憾みとされていたが、最近石井鶴三、中川一政、河野通勢、木村荘八、林唯一、岩田専太郎氏ら斯界の重鎮の間に強力なる新団体結成への気運が動いていたところ、美術通の中島重太郎氏の奔走によって、漸くこの「挿絵倶楽部」の誕生となり、前記諸氏の他あまね普く現在挿絵画家として活躍しつつある画家約五十名を網羅するもので、鍋木清方、小杉未醒画伯を顧問に推し、会員相互の共同利益の擁護、技法の錬磨等、挿絵界の発展進出のために諸種の事業を行う筈である。即ち機関誌『挿絵』の刊行、挿絵賞制定、挿絵図書館の設置、展覧会の開催、関係法規の改善等で、「大菩薩峠」の中里介山氏と石井鶴三氏の問題をはじめ従来しばしば論議紛糾を巻き起した作家と挿絵画家の問題、挿絵原稿料の問題等も凡てこの倶楽部の目的とするもので、発会式は十六日夕方六時より丸の内マールに於て四十余名出席して行われる事になった。

1936 16 May

昭和 11 年 (1936 年) 5 月 16 日 “挿絵クラブ” 生る (都新聞)

稿料著作権等にも役立てる 石井画伯語る

石井鶴三氏談「挿絵が芸術として認められるやうになった以上、かういふ機関の存在は絶対に必要だ。従前個々人の間でごたごたやっていた原稿料、著作権其の他の問題も倶楽部が出来れば、全挿絵画家の問題として処置できるし、色々役に立つことと思う。」

『都新聞』 昭和十一年五月十六日